

小学校外国語活動と評価法の進め方

教育開発研究所編（2010）「小学校・中学校『新指導要録』解説と記入。教育開発研究所、pp. 52-56

*本稿は上記論文のドラフトである

吉田研作（上智大学）

- ① 評価法は、「減点評価」と「加点評価」があるが、小学校外国語活動は、「加点評価」が求められる。
- ② 「加点評価」は、やればやるほど評価が高くなるので、モチベーションを高める効果がある。
- ③ 小学校外国語活動で求められる評価は、ことばと同時に文化等の国際理解の両方を含む。
- ④ 小学校外国語活動は、子どもたちが積極的に取り組みたいものにすることが最も大切である。

小学校外国語活動の評価については、色々な議論がある。確かに、他教科と同じような 5 段階評価や点数による評価をしてはならないことになっている。では、どのようにすればよいのか。本稿では、外国語活動における評価の問題について考える。

新学習指導要領に見られる評価の観点と趣旨

新学習指導要領の外国語活動の記録における評価の観点として、文部科学省から下記のものが発表された。

観点

コミュニケーションへの関心・意欲・態度

趣旨

コミュニケーションに関心を持ち、積極的にコミュニケーションを図ろうとする。

観点

外国語への慣れ親しみ

趣旨

活動で用いている外国語を聞いたり話したりしながら、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しんでいる。

観点

言語や文化に関する気付き

趣旨

外国語を用いた体験的なコミュニケーション活動を通して、言葉の面白さや豊かさ、多様なものの見方や考え方があることなどに気付いている。

本稿では、上記の観点を具体的にどのように評価へとつなげていけばよいかについて考えてみる。

減点評価と加点評価

その前に、評価について大切なポイントについて述べる。一般に、我々教育現場でテストなどを用いて生徒を評価するときは、絶対評価にせよ相対評価にせよ、基本的には、「減点評価」法が用いられる。

相対評価の場合も、必ず誰かと比べて上なのか下なのかが問われ、最もできる生徒を頂点に（例えば、5段階評価の5）、他の生徒は、その生徒と比べてどれだけ下か（4, 3, 2, 1）、という評価が下される。つまり、一番良い人の成績から「減点」された結果が示されるのである。

絶対評価の場合は、生徒の出来不出来とは無関係に、あらかじめ客観的な基準が設けられ、それに到達しているかどうかによって評価される。ここでも、全部できることが基準（例えば100点）で、一つでもできないものがあれば、それから「減点」されるのである（95点、80点、55点のように）。

学校における評価で、いわゆるテストの結果が最も重きを置かれている場合は、そのほとんどがこのような「減点」評価になっている。このような減点評価は、一般的に、学習者の学習意欲を削いでしまう。いつも、自分は何かが「足りない」という気持ちにさせるのである。また、「間違い」が減点の対象になるので、どうしても正確さを求め、間違えてはいけない、という受け身の学習姿勢を助長する傾向があると言えるだろう。

このような減点評価とは逆の、「加点」評価という方法が考えられる。これは、ある一定のベースライン（最低必要レベル）を基準に、それ以上できたことに対してどんどん加点していく、という考え方である。ポートフォリオ評価の多くはこれに類するものと言えよう。加点評価には、減点評価のような「満点」はない。それどころか、やればやるほど加点されるので、「青天井」なのである。また、あまり出来の良くない生徒も、決して減点されることはなく、少しでもうまく言ったことに対して加点評価される、という動機づけへとつながる可能性を秘めている。本来、加点評価の場合は、減点評価の時のような成績はつけないのが原則だろうが、実際には、何らかの成績をつけないければならなくなる。しかし、その際は、同じ5段階評価の3でも、5と比べて足りないので3になっているのではなく、「～ができるから2」、「～ができるから3」、そして、「～以上できる人は誰でも5」というように、絶対的評価基準の階段を一段ずつ登っていくことによって成績が上がる、という考え方が適用されるだろう。

さて、小学校外国語活動の場合、少なくとも正式な形で評価（例えば、5段階評価）はしないことになっている。つまり、小学校外国語活動では、いくつ単語を覚えたか、いくつ文法を覚えたか、ということは大切ではない。先生が **Stand up.** と言って、生徒が正しく反応して立っただけで、**Very good.** と褒められる。つまり、先生が言っていることが「分かった」、自分が言ったことが先生に「通じた」、という体験が先生の「褒めことば」によって確認され、その体験こそが重要なのである。

コミュニケーションへの関心・意欲・態度

では、今回の評価の観点に基づいた評価法について考えてみよう。

まず、最初の観点は、「コミュニケーションへの関心・意欲・態度」で、その趣旨は、「コミュニケーションに関心を持ち、積極的にコミュニケーションを図ろうとする」となっている。関心・意欲・態度の評価は難しいが、一般的に使われる基準としては、どれぐらい積極的に活動に参加しているか、というものがある。具体的には目に見える行動で、（1）手をあげる回数、（2）発言回数、（3）声の大きさ、また、ペアやグループ活動の時に（4）与えられたタスクをどれだけやっている（参加度）か、というようなことがあげられる。なお、これもベースラインは何もしない、ということなので、何かやれば必ず加点評価されることになる。

外国語への慣れ親しみ

次に、観点としては、「外国語への慣れ親しみ」があるが、その趣旨は、「活動で用いている外国語を聞いたり話したりしながら、外国語の音声や基本的な表現に慣れ親しんでいる」かどうかと言うことになっている。外国語を聞いているかどうかは、先生や他の生徒の英語に対する「反応」でみることになるだろう。(1) 先生が言ったことに対してうなずいているか(例、Do you understand? に対してうなずいたり、Yes と答える)、(2) 先生の指示に従って行動しているか(Make a line. と言われて、ちゃんと列になるか)、(3) 先生に質問されたら答えられているか(例、What color is a banana? Yellow. というように)等がそうである。また、発話に関しては、(1) 英語の歌やチャンツが言えるか、(2) 先生の英語の繰り返しを大きな声で行っているか(例、Repeat after me. とか I can't hear you. などに対して大きな声で繰り返す)、(3) タスク等で練習した表現が使えるようになっているか等を基準にできるだろう。ここでも、ベースラインは特に何もしない、ということから、これらの行動あるいは発言をすれば、加点評価する、という形を取るようになる。

言語や文化に関する気付き

三つ目の「言語や文化に関する気付き」という観点だが、その趣旨は「外国語を用いた体験的なコミュニケーション活動を通して、言葉の面白さや豊かさ、多様なものの見方や考え方があることなどに気付いている」となっている。まず、言語に関する気づきだが、その最も大きなものは、(1) 日本語との相違点に気づくかどうかだろう。日本語と違う、とか、日本語でも同じ言い方があることに気づくことがあげられるだろう。例えば、日本語では、兄と弟、姉と妹、という表現があるが、英語には、brotherとsisterしかないことに気づけば良いだろう。また、発音等の言語要素のついても、例えば、[r]と[l]の違いが英語にはあるのに、日本語にはないことに気づいたり、日本語には後置詞(助詞)があるのに対して英語には前置詞があるとか、英語は主語が必要だが、日本語は必ずしも必要ない等のことに気づくことができることが求められている。

ことばそのものに対する気づきを評価するのは難しいが、例えば日本語と英語の表現の違いが分かったら、今度は自分たちでこの場合はどうだろう、という活動を積極的にすることができる。例えば、英語の Excuse me.という表現が使われる状況を皆で考える(ものを尋ねる、謝る、人の気を引く、聞き返す、反対であることを表明する、など)。そこで、日本語ならそれぞれの状況でなんというかを皆で考える、ということを通してことばに対する気づきを育てることはできるだろう。また、これとは逆に、ある状況を設定して、その時に日本語と英語でどのような表現を使うかを皆で考える(例、店員さんがつかう表現の比較など)。このような活動に積極的に参加しているかどうかで評価することが可能だろう。

次に、文化への気づきだが、それは、自分を指す時に鼻を指すか胸を指すか、というような(1) ジェスチャーの違いがあげられるだろう。(2)としては、生活習慣の違いなどが考えられる。例えば、家に入るときに靴を脱ぐか履いたままに入るか、というようなことが考えられるだろう。ちなみに、これらは、個人の行動レベルのものである。それに対して(3)社会的な出来事等、個人を超えた文化の相違点に気づくことが含まれているだろう。例えば、日本には、相撲があるが逆にイギリスを中心として英語圏には、クリケット、というスポーツがある。アメリカでは、クリスマスは家族で静かに過ごし、信念はみんなと一緒ににぎやかに過ごす、という習慣があるが、日本では、その逆だと言っても良い。ポイントは、世界には色々な文化や生活習慣があることに気づくことで、外国語によるコミュニケーションの素地を育てよう、というのである。

このようなことばや文化、生活習慣についてどう評価するかは簡単ではない。しかし、外国語活動の最も大きな目的が、ことばそのものを学ぶことよりも、それを通して国際理解能力を育成することであることを考え

ると、外国語を使って日本と外国の違いや類似点について、クイズ（例、Which is bigger, Japan or China?）などを積極的に作って互いに外国語で答えあったり、日本人が外国語を使う状況について考え、それを基に自分たちでタスクを考え実行する、というような形が考えられるだろう。例えば、私が見せてもらったある小学校6年生のクラスでは、日本人が英語で買い物をする状況を考え、国内より外国の方が普通だろうと考えた。そこで、外国で買い物をするためには、まず、その国に入国しなければならないので、最初に入国審査をし（例、What's your name? Where are you from? How old are you? など）、入国が許されて初めて何が買いたいかを尋ねられ、その答えによって、お店に案内される。そこで、初めて買い物が許される、という。しかも、皆で調べ、その国の名物を揃えたお店を用意する、というものだった。このようなタスクへの積極的な参加を評価の対象とすることは可能である。

また、ジェスチャーの場合は、例えば、皆で一種のジェスチャー・ゲームを考え、色々なジェスチャーに対して、英語でI think that means 'Thank you' (I'm sorry/ Not me/ I don't know/ Give me ～など)、と言いつつ、という活動を行うことにより、評価は可能だろう。

なお、これら全てにおいても、減点評価ではなく、加点評価が用いられることをもう一度確認しておく必要がある。つまり、答えが正しいかどうかではなく、自分たちで考え、答えを考えること自体が大切なのである。文化的内容の場合、いわゆる正しい答え、というのは当然あるだろうが、生徒たちが活動をし終わった後で、先生が教えてあげれば良いので、外国語活動の場合は正解自体は問題ではないのである。また、ALTや外国語・外国文化に詳しい外部指導者が一緒に授業を行っている場合は、その人が最後に知識として教えてあげれば良い。ジェスチャーなども国によっては誤解を生む可能性があるため、最終的にはできるだけ正しい意味を教える必要があるだろう。しかし、正解をどれだけ覚えているかを評価し出したとたんに、減点評価になってしまうことを注意しなければならない。大切なのは、活動することであり、正解を覚えることではない、という点を忘れないようにしなければならないのである。

おわりに

以上のように、小学校外国語活動では、加点評価が原則であり、あくまでも、子どもたちが外国語を使ってコミュニケーション活動を行うことに対するモチベーションを上げ、外国語によるコミュニケーション活動を楽しみ、また、日本および外国や外国の文化に対する興味関心を抱かせることが目的であることを忘れてはならないのである。